

老いを生きる～シニアボランティア研究

李裕美

0. はじめに

人生80年時代、いやもう90年時代といってもいいほど平均寿命が急速に延長してきた長寿社会では、老後をいかに生きるかという意義がますます問われてくる。老いの意味とは、老いて生きることの主体的・積極的な意味、また人間としての生の意味を、最後まで問い続けるプロセスである。男性は定年後、女性は子育て終了後20年以上もある人生を、以前のような“高齢期という余生”や“付け足し”という言葉ではもはや適合できない長期間にわたる新たなステージが用意されることになった。そこでは、活動主体としての老年を捉えることにより、多様なライフスタイルを持つ高齢者が増加してきた。ここでは、元来ボランティア活動の受け手であった老人が、ボランティアをする側にまわるといふシニアボランティア活動を通じて、老いの生き方というものについてインタビューから見出していく。

1. 高齢者像の変容

(1) 家規範の脆弱化

家制度のあった第二次大戦前には、年老いた親を扶養することは、家督相続人である長男に課せられた義務であった。戦後、家制度は廃止され、直系家族制から夫婦家族制へという家族理念の大幅な転換が発生した。また民法の改正によって、財産はきょうだい間で均分相続され、親に対する扶養義務も長男一人からきょうだい全員の義務へと拡大されることになった。家族形態が核家族化したばかりではなく、イデオロギーとしての核家族化も進行した。イデオロギーとしての核家族化とは、家制度的な意識を否定し、夫婦と未婚の子からなる核家族の幸せの追求を第一に置く考え方である。戦後教育を受けた世代が成人期に達するにつれて、親に対する孝養や自己犠牲精神は弱体化した。というよりも高学歴化に伴う教育費の高騰、住宅費の高騰が、気持ちの上では親を扶養したいと思っけていても、その実現を困難にしているのである。また、近年の現象として、60～70歳代における夫婦家族の比率の上昇や、単身世帯における高齢女子の比率の上昇は、年老いても子と同居しない高齢者の増加を示すものである。高齢者自身が、子供に頼ろうとせず、老後は夫婦二人で過ごしたいと考える割合が著しく高くなっているのだ。たとえ配偶者と死別して一人になったとしても、気を使いながら子供と同居するよりは、自由気ままな独居をすることを高齢者自らが選んでいるのである。また一方で、高学歴化に伴う結婚観の変化によってもたらされる晩婚化や出生率の低下のいっそうの進展なども、明らかに家規範の弱体化と連動する動向であると考えることができる。これらの変化は、総じて、子や孫に囲まれて過ごす高齢者像からの変容を促す兆しとして受けとめられよう。

(2) 年齢規範の揺らぎ

制度としての家の解体は、隠居という伝統的形態を大きく変化させた。つまり、核家族

化によって老夫婦のみで構成される家族形態の比率が上昇し、高齢という年齢的地位に対して期待されていた役割、すなわち年齢規範ないし高齢者への役割規範もその拘束力を失っていった。静かに穏やかに日々の生活を営むことが当たり前とされていた生活形態を一転させた。近年では、旧来の高齢者像を高齢者自らが打ち破るような、様々な活動を見聞することが多くなっている。社交ダンスに興じる高齢者や、ボランティア活動に従事する高齢者など、高齢者自身が積極的になって活動している。また高齢になってからの離婚や、単身高齢者同士の結婚、他方で配偶者との死別後、むしろ元気で一人暮らしを謳歌しているような高齢者など、老後生活というものが非常に多様性に富んだものとなっている。新たな高齢者像というものが定着しつつある。

(3) 新たなライフスタイル・期待される高齢者の役割

平均寿命の延長は、いわゆる“人生80年時代”あるいは“90年時代”を生み出している。加えて、高学歴化、晩婚化、少子化によって、ライフサイクルは大きく変化した。かつてに比べて、より長い老後期間が出現したのである。“人生50年時代”に創られた生活様式、社会慣行、が“人生80時代”に適合できなくなるのは当然のことであろう。昔の倍ほどにも長くなった人生、老後も長くなり、生活も豊かになった半面、地域社会（コミュニティ）や人間関係は逆に崩壊現象を示し始めている。そうすると、そういう社会の中で“意味ある老後”を送るためには、老人自らが主体者となってそれを自主的に創造していかざるを得ない。またそうなることを期待されているのだ。企業や家族の責任から解放された高齢者は、自分自身のために時間やお金を費やして自分のために生きていくことができる、自己実現の時期である。自分のために行う活動が、地域社会の発展にもつながるという社会参加が高齢者に期待されている。高齢者のニーズが増加するという点で、よりよき地域社会作りの核として、また喪失しつつある地域の文化や家族文化の継承者としての高齢者の存在は、個人活動が社会活動につながり、高齢者文化を創出していく契機となる。またより良い老後を過ごすには、年をとってから生きがいを持ち続けることが大切となる。生きがいというのは、高齢者に限らず、成人や青年においても全て人々の主体的活動の中で生まれるものであり、外部からのおしせきで創られるものではない。社会の中で徐々に自己の役割を失っていく高齢者にとって、生きがいを持つということは老後をいかに意義あるものとして過ごすかに大きく関わっている。

2. シニアボランティア

(1) 増えつつあるシニアボランティア

高齢社会を迎え、長期にわたる老後生活が用意されるようになると、老人自身が積極的な生き方というものを求めるようになってきた。ボランティアというと、老人は受ける側というイメージを抱きがちであるが、老人自身が主体者となってボランティアをする側にまわるといふ、いわば福祉の受け手から福祉の主体へとその位置づけを転換させたのがシニアボランティアである。これは高齢社会を迎えた社会からの老人に対する要請であると同時に、老人自身の要請にも沿った社会参加の一形態である。そのシニアボランティアは

徐々に増加しつつある。その数というのは決して多くはないが、しかし確実に増加している傾向にある。この増加の背景を5つ箇条書きで挙げてみる。

1. 老人層が経済的に一定の安定が得られるようになってきたこと
 2. 自分の自由になれる時間の増大（家族形態の変化：核家族化）
 3. 健康管理がしやすくなった（医学の発達）
 4. 精神的充実を求める欲求の高まり
 5. 社会に役立つ活動を通して生きがいを得たいという老人の増加
- 以上挙げた中で、4、5、はここ10年で特に目立つ傾向にある。

(2)シニアのパーソナリティ特徴

老人のボランティア活動は他の年齢層のボランティア活動と比較すると、活動範囲は狭まるが、その一方で老人だからこそできる活動というものもその中から見受けられるのだ。例えば人生経験豊富な老人だからこそ今まで蓄積した体験や経験を生かした活動などはまさにそれにあたるだろう。また、自分の趣味・特技を生かした（編み物、料理等）分野で活動するという事で趣味・特技の延長線上にボランティア活動を位置付けることができるだろう。このことは老人だけに限らずどの年齢層にもいえることだろう。。また、老人のボランティア活動で一番大事なことは、健康であるということである。健康でなければ活動を続けていくことは困難であろう。

(3)多様な活動内容

シニアボランティアの活動内容について見ていく。その活動内容というのは実に多様で、たとえば、身近なものでは町内会の役員が挙げられるのではないだろうか。これも一種のボランティア活動であろう。他には、病院で患者の身の回りの世話をしたり、寝たきりや病弱の人や障害者を対象とした入浴サービスを行ったり、独居老人を対象とした給食サービスを行ったりなど、数え挙げればきりが無い。また、趣味や特技を生かして、手芸や花、茶道を教えたり、壊れた玩具を修理したりなどといったものもある。

3. インタビュー分析

(1)インタビュー対象とその方法

Aクラブ（民生委員を中心としたシニアボランティア団体）で、65歳以上の独居老人を対象とした食事サービスと友愛訪問活動をしている民生委員3名（M<仮名>：74歳男性、T：74歳女性、Y：73歳男性）と、民生委員は引退したが、引退後もAクラブにお手伝いについてる方1名（N：78歳女性）と、民生委員引退後はAクラブとの関わりはない方1名（K：82歳男性）の計5名の方に1対1形式で、私が投げかける質問に対して答えてもらった。人選は、いろいろ話してくれそうな人をAクラブのメンバーの一員に聞いたりして、適当と思われる人にインタビューをお願いした。

(2)インタビュー分析

[1]ボランティアの場＝地域社会参加の場

まず、ボランティアの場を地域社会参加の場として定義付けることができる。Mは民生委員の他に防犯委員、治安会、町内会長、町蓮の福会長、町づくり協議会の議員、公民館の理事をしており、Yは防犯委員、山を歩こう会の手伝い、Nは近所の小学校の行事の手伝い（七夕、餅つき）等といった多種多様な地域社会参加活動を行っている。つまり、様々な場所に自己の役割を設けている。自己の役割を持つということで、自分の存在（価値）を明らかなものにしていくといえる。つまり、職業等によって失われた有用感や充実感を新たな社会活動によって獲得しているといえるだろう。また、この自己の価値を結果的に地域社会に求めているということになるのではないか。「高齢化は個人レベルで欲求充足実現の社会レベルにおける意図せざる逆機能効果であるが、個人にとっては高齢者の役割喪失というかたちで欲求充足の剥奪を結果する。これを防止するための高齢者役割の創出はいろいろの角度から検討してみて、結局地域社会とのかかわりにおいて考えられるほかはないのではなかろうか。」[富永健一：社会変動としての高齢化]と述べている。確かに家族役割と職業役割を喪失しやすい高齢者にとって、残された役割回復や組み替えの生活場面は地域社会となるだろう。が、しかしここでいう地域社会とは、家以外の場所というふうには、地域社会を広義の意味でとった場合にこういうことが言えるのではないだろうか。また社会参加というのは、何か高齢者がある意味で一つの方向に管理してしまうような一斉社会参加ではなくて、もちろん皆で参加する活動もあっているのだが、一人一人が自分の才覚というか、自分の能力を試してみるような社会参加が望ましい。それが結果として大勢の社会参加になっているという多面体で多様な社会参加が望ましいのである。

[2]社会参加をするわけ～第一段階社会離脱のその後として

それでは人々はなぜ社会参加をするのだろうか。まず、社会参加を始めた時期に注目してみる。男性の場合、定年後、あるいは定年数年前に対して女性の場合は、子育て終了後頃である。この時期というのは（特に男性の場合）、ちょうど社会からの離脱が（つまり定年のこと）強られる時期である。社会からの離脱について説明しておく。人というのは、社会において様々な役割を獲得し、その役割に合ったパーソナリティーの形成を行っていく。社会の側が老人を遠ざけるか、あるいは老人自らが社会から身を引くか、いずれかの方法で社会的な役割を一つずつ失っていくことになる。後者の場合は老人自らが決定しているため、本人にとってはそれほど大きな問題ではないが、本人が望んでいないにもかかわらず、やむなく社会から離脱しなければならない場合様々な問題が生じる。特に「定年」制度においては本人の能力や希望は考慮されず、年齢によって役割を喪失するのであり、労働意欲も能力も残っている者にとっては、大きな衝撃である。職場から離れ、社会のどこにも所属しない空しさや不安、社会関係の縮小など、様々な変化を定年は余儀なくさせるのである。社会からの離脱というのは、自己の存在価値をあたかも喪失させるかのように思わせるのである。この定年を迎えた為に生じる社会からの離脱を、後に述べ

る第二段階社会離脱に対して、第一段階社会離脱と名付ける。第一段階社会離脱を迎えた人々は、それまで職場に置いていたアイデンティティ基盤を今度は地域の中に移し換えているのではないか。以前は職場に置いていた社会的関係を今度は地域の中で作りあげようとしている。M「まあ、結局家ばかりおって、テレビやばかり見よったらもう自然にそないなっしてしも一てあかんけんね。やっぱ“人は人中、地は地中”っていうてな、人の中に出て、ほして話を聞くということは、非常にほの一人間に大切なことなんよな一。」から人の中に出て、相互に話をするというコミュニケーションをはかるということは人間にとって大切なことと言っている。またT「やっぱし年いったらこうやって皆のとな一緒にね一出てお話した方がいいと思うけどね。」というふうにもここでも人の中に出た方がいいと述べている。この発言はAクラブ主催の食事サービスを受けに来る高齢者（ボランティアを受ける方）に向けて発言しているが、と同時に、ボランティアをする側にも言えることである。人間とは人と人との間で生きており、コミュニティ（地域社会）がいつの場合も生活や生存の基盤となる限り、人と人との絆なしではより良く生きることができない。これは人間社会の根本原理といっても過言ではないだろう。またボランティアをする理由としてT「ま一できるだけ人のためにボランティアして、ためになることしといたら、自分もまた年いってね一、なにできるようになったら、また若い方にさせていただけるかなと思うて、ハハハ。」と、自らの老後（75歳以上の後期高齢時）に備えて、今度は自分がボランティアを受ける側に回るかもしれない場合に備えての貯蓄のようなものとして活動していた。つまり、体の動くうちはボランティア活動を続け、動けなくなったら、ボランティアの受け手になる、その時に備えての貯蓄としているのだ。しかし、こうは言っても実際にそうなった場合（体力的に活動持続が困難になった場合）に果たして、ボランティアの受け手に本当に回っているのかといえば、定かではない。というよりは、多くの場合、ボランティアの受け手にはなっていないだろう。こういえる根拠は、後で述べる第二段階社会離脱説に多いに関係しているので、その時に述べることにする。引き続きボランティアをする理由に戻ろうと思う。T「やっぱり気がはって明日はボランティア行かないかんと思うたら体がシャキッとするような、不思議なね一。」、Y「うん、おもしろいってね、やっぱり張り合いがあるですな一。ま一会社退職したら一応ね暇になるでしょ。そういうんがあんまり感じなく、ね」、Y「ほりゃ一やっぱり人を知ることと、暇な時でも活動をね。出ていくということによって余暇を有効に使えるっていうんですか。そういうのがありますわな。」、N「ま一自分が楽しんですることとほれと元気でいることやな一、」から、ボランティアをすることで生活に張り合いを持たせていることが分かる。気持ちに張り合いを持つということは精神的充足を保つ上で非常に重要なことであり、もちろん、健康だから活動を続けることができるのだが、活動を続けているからこそ健康でいられると言うこともできるのではないか。このことはN「(ボランティアをしていると)あと元気でいられるわな一元気で一。」を証拠としていえることである。また、M「結局あの一やっぱり人のお世話もし、お世話になったお返しをするんだというようなこともあったわけ。いろいろと、わしは県庁に30年余りおったもんだから、ほなけん地域の

人にいろいろとお世話になつとるわけやな。ほれをお返しするというたらこら語弊があるかもしれんけども、まー何かして、いわゆる地域の人のためにやらないかんということじゃなー。」、Y「私は戦争にいて、まっ人に助けられて、無事帰ってきたということで、できるだけ人のお世話しといたらまたほの徳がね、自分に廻ってこんでも子供の代にね廻ってくるとねー、まー恩返しのもりでしたわけなんです。」から以前お世話になったその恩返しとしてボランティア活動をしているというわけである。この、以前お世話になったその恩返しというのは、シニアならではの特徴なのではないか。つまり、長年人生を歩んできた中で、様々な人の恩恵を受けたそのお返しというのだ。若い人にも以前お世話になったその恩返しとしてボランティア活動をしている人はいるが、しかし、シニア世代に比べると、その比率ははるかに低いだらう。こういうようなことから、やはり、ここにシニアらしさが現れているといえよう。第一段階社会離脱のその後としての、老人の社会参加、つまり、シニアボランティア活動は結果的に“老い”を遅らせようとする努力の一つであるといってもよいのではないか。

[3]男女のボランティア観

男性と女性のボランティア観を比較すると、おもしろいことに、感覚的相違が生じた。それはボランティアに対して、男性が地域の向上をはかるお仕事の感覚（第二の仕事）にボランティアを置いているのに対して、女性は家庭の延長線上、趣味の延長線上にボランティアを置いているということである。ここでちょっと第二の仕事について言及したい。前市岡楽正は『21世紀の高齢者文化』の中で次のように述べている。「我々が労働のあなたに求めるべきは、非活動<無為>ではなく活動である。しかしそれは<遊び>ではない。それは、休息や気晴らしではなく生活に意味と秩序を与えるもの、非日常的ではなく日常的なもの、弛緩ではなく持続的緊張、放しではなく勤勉である。したがってやはり「仕事」と呼ぶのが適当だらう。ただしそれは従来の仕事（分業にもとづく社会的生産）ではないから（生産・消費・遊びの意義を否定しているのでは無論ない）、<第二の仕事>と名付けよう。」ここで男性のお仕事の感覚だけがこの第二の仕事と呼べるのではなく、女性の場合もそう呼ぶことができる。つまり、第一段階社会離脱のその後としての社会参加、ここではボランティアについて、第二の仕事と呼べるのではないかといっているのである。これについてはそう呼ぶにふさわしいのではないかと思う。というのは、生活に意味と秩序を与えるもの、非日常的ではなく日常的なものであるという部分で、シニアボランティアと共通するものがあり、第二の仕事というふうに呼べるのではないか。さて、こゝらで本題に戻ろうと思う。男性の場合[1]で述べたように主に地域を守る社会参加活動に従事している。その結果、Y「やっぱり自分の持つとる地域はね、自分が守つとるような気持ちでねー、」というように、まるで地域を守る仕事のように感じているのである。一方女性の場合T「だからAクラブ（食事サービス）やったらまあ私や普段ねえ家庭でしよるようなことをするから、ほれは訳無しでできるんやけどね。」、N「料理はね好きなんよ。得意じゃないけど好きなの。ほなけん自分の趣味を生かしてしてあげるっちゆうことは楽しいわな。」ということから、家庭や趣味の延長線上にボランティアを位置付けてい

ることが分かる。男性のその地域の向上をはかるお仕事の感覚というのが以前から持ち合わせていたものであるからそういう地域向上的ボランティアをしたのか、あるいは、偶然にしたボランティアが地域向上をはかるものであったからそういう感覚が生じたのか定かではないが、恐らく後者の方が有力だろう。といえるのは、M「まあーなんじゃわ、人に頼まれてなしくずし的にボランティア始めたことじゃわ。」 Y「やむを得ず、私やこんなことしたくなかったんですけどね、ハハハ、一応してみたんです。」からボランティアはなしくずし的に始めたという人の方が多いのではないかと考えられる。なしくずし的という聞こえは悪いかもしれないが、つまり、たまたま頼まれて、ボランティアをすることになったということである。つまりここでは頼まれて民生委員になったということである。MとYにかかわらず、他の人もたまたまボランティアを始めているのである。恐らく民生委員になったほとんどの人が、なにかしら頼まれて始めたものと考えられる。ここにまた、シニアらしさが現れている。どういうことかというシニアボランティア活動を始めたきっかけというのが、市の方から推薦されて始めたということで、自ら率先して始めたのではないということである。つまり、シニア世代はなかなか社会参加、ここではボランティアをする機会というものがあまり設けられていないから、市の方が推薦することによりその社会参加の機会が設けられているのである。ここにシニアというものの動機の社会的承認が行われている。又この“たまたま”というのとは“ボランティアの二面性”に通じるものがある。ではこの“二面性”とはなんであるのか説明していく。これは“ボランティアにこそ”と“たまたまボランティア”の二つに分類できる。どういうことかといえば、社会参加の場をボランティアにこそ求めたのか、それとも社会参加した場がたまたまボランティアであったのかということである。つまり、“たまたまボランティア”の社会参加では、実は他の場所、例えば、カルチャーセンターの場でも良かったということである。つまり、社会参加すること自体に意義を見出しているのである。しかし、ここで大切なことは、たとえ“なしくずし的にやった”ボランティアとはいえ、一旦活動を始めれば、それを自分自身の中にバランスよく取り入れているということである。Mはボランティアの留意点を十程自分で作っているし、またM「まあまあしかし、いろいろ勉強することがなー、ボランティアっていうもんはどんなもんか、そういうのはあまり考えてなかったわけよね。そやから純な気持ちで人のお世話ができるということに感謝しとるということ。」 Y「いろいろ人にお世話になったからちょうど都合がよかったですかねー。」というように一旦始めたボランティア活動というものに従事しているといえる。このようにたまたま始めたボランティアではあるが、自然とそこに、地域のお仕事の感覚を抱いたり、家庭や趣味の延長線上にボランティアを位置付けることによって、ボランティアを上手く自分自身の中に位置付けているといえる。

[4]第二段階社会離脱

次に第二段階社会離脱について説明していく。第一段階社会離脱を迎えた人の中には、まだ社会との関わりを持ち続けたいと思い、社会的つながりを求めての社会参加というものが営まれる。この社会参加というのは、趣味サークルであったり、老人会であったりと

何でもよいのである。ここではボランティア活動についてみていっているが、ボランティアだからこそ／たまたまボランティアというふうに参加の動機は誰でもよいのである。つまりここではボランティア活動をすることで社会との接点が得られればよいのである。ボランティア活動をすることで自己の役割というものを獲得し、そこでの役割の獲得は社会の中においての役割の獲得ともいえるだろう。また、新たな人間関係形成へともつながるだろう。ボランティア活動とは、当たり前のことだがボランティアする側とされる側とから成り立つものである。ボランティア活動ということで、ボランティアする側の活動を通しての社会参加であるが、この活動というのは一生続くものではない。やはりある程度の年齢になると体に支障をきたし、活動を続けていくのが困難になる。そうなるとここで再び社会からの離脱を余儀なくされる。ここで生じる離脱とは、ボランティアという場からの離脱のことである。が、しかし、今まではボランティアの与え手だったからこそ生じる社会離脱だから、今度はボランティアの受け手に回ることによってここで生じる社会からの離脱も難無く解消されるかのように思える。実際に現在も現役でボランティア活動をしている人にインタビューしたところ、M「いわゆる“する”より“受ける”方になるんよー今度は。いつまでもほらボランティアで人のお世話をしてあげるってことはええことやけんどもなかなかそれができにくーなるわな、年をいくに従うて。」、T「何かお年寄りの、老人会とかね、あんな会がいくつもあるから、そんな会に入ってこっちの方がお世話になろうかなと思う。される側にねー、回るような、年いったらねー。」、K「いやー受けるんでー、立場が変わったらやっぱりボランティアの方はありがたいと思うな。今まで世話をきて、今度はこっちが世話を受けるような、年齢的にも体力的にもね。」、N「受けれるようになった場合は、今までのことが勉強になつとーわな。わがままを言わんと、勝手なことせんよーとな。ボランティアしてもらう方になってきたら素直にならなんだら、してくれよー人に対してすまんでー。してもらうよーなってきたら今までの経験じゃ。」というふうに、今現在ボランティアの与え手であるからこそ、今までの経験上ボランティアの受け手に回った場合のボランティア与え手の気持ちを汲み取ることができるといい、自分がボランティアの受け手に回った場合の想定をしてはいるが、では実際のところはとなると、恐らくボランティアの受け手には回らないだろう。これを先の第一段階社会離脱に対しての第二段階社会離脱と呼ぶ。この両者の大きな違いは第一段階社会離脱は自己の選択権が関与しない（選択権なし）のに対して、第二段階社会離脱は、自己の選択権が関与しているということである。第二段階社会離脱は自らの決定でなされているのである。ボランティア活動の与え手が、ボランティア活動の受け手に回らないだろうといえる根拠はN「いやーほなけん（Aクラブと）別には嫌やなー。んーやめてしもうてからまっ食べには行かんだらうと思うけど。今まで自分がしよったしよったのに、なにか年がよったけん食べに行くやいうのもなんか気にならへんかいなと思う、んー、ハハハハハ。」というふうに、現在ボランティア活動をしている人の“受け手想定”とは矛盾した答えを得ることができたからだ。Nは現在独居暮らしをしており、つまりAクラブの食事サービス対象（65歳以上の独居老人）に入っているから食事を受けることは可能にもかかわらず、受け

ることを拒否している。この“受けづらい”という現象は、ボランティアをその場で実際に活動をしていたからこそ引き起こされる現象なのではないだろうか。もし仮に、今までボランティア活動していた場以外の所で、初めからボランティアの受け手として参加するならば、このような現象はこんなにも起こり得ないのではないだろうか。つまり今までは活動主体としてその場に参加していたからこそ、その場で活動被主体として参加することで急に老いを見近に感じ、抵抗を持つのではないだろうか。第一段階社会離脱のその後としてのボランティアという社会参加であったが、ボランティアの与え手という社会参加はボランティアの受け手という社会参加には成り得なかったということの意味している。短的に言えば、ボランティアを“する”はいいが、“される”はいやということである。実際の言葉にも、M「ほなけんどやっぱりせられるよりする方がいいってことやなー。」、K「まーしかし、受けるよりもする方がほらいいですね、ええ。」、N「でも受けるよりもする方がいいな、楽しいなー。今のところ元気でしよるからねー。」というように“される”よりも“する”方がいいと言っている。この“する”と“される”の間に大きな壁を造っているのは果たして何なのであろうか。少なからず彼らのプライドが関係していることは間違いないであろう。今までは活動主体であったからこそ、被主体になることで、老いを身近に感じてしまうのではないだろうか。では何故ボランティアは“される”より“する”方がいいのだろうか。なぜそういうふうにするのか分析していこうと思う。まず考えられるのが、今の現状として健康であるから、ただ単に、自分のことだけでなく他人の世話が今はできるからそういうような答えを発したのだろう。それと、そう考えるのは、やはりボランティアが一方的にしてあげる／してもらおうという考え方がどこかで根強く残っているからともいえるのではないか。“する側”は、してあげているのだというような思いはほとんどないとしても、やはり、“される側”はしてもらっているという思いがあるのではないか。やはり恐らくプライドというものが多くに関係しているのであろう。以前、高い役職についていた人程、こういう思いというのが強くなるのではないか。世論的にはボランティアは相互作用であると唱えられており、ボランティアする方もそうは言っているがしかし、ボランティアは相互作用という考えは、個人の心底には及んでいないのではなかろうか。それはつまり、実際に活動しているボランティアが一方的なものであるのかもしれない。

4. まとめ

老いを生きるというテーマでシニアボランティア研究をインタビューという方法で進めてきた。そこでシニアボランティア活動の位置付けは、1. 生き方の充実および社会関係の広がりという視点の強調、2. ボランティア活動のイメージの変更すなわち「社会奉仕」というイメージから「豊かな社会の創出」といったイメージの強調、3. 「受動的な高齢者像」から「主体的な高齢者像」というふうにできる。つまり、私たちが共通に内面化している高齢者に対する規範の打破といってもよいのではないか。すなわち、年齢に対応して人々の演ずるべき役割を規定する規範＝年齢規範や、高齢者に対する私たちの役割を規定する規範＝役割規範など、以前の規範とは違った見方でシニアをとらえているし、

またシニア自身もそのようであるのである。高齢社会を迎えた現時代では、シニアのニーズが高くなり、シニアがシニアを支えていくというシニアボランティア活動は、これからのよりよい社会を創るために必要不可欠なことであるのは言うまでもない。社会の側がそう要請しているし、また高齢者自身もそうあるものであると認識しているのである。

また第一段階社会離脱を迎えた人々には多大な時間が用意される。そういう意味では、老年期は豊富な時間への挑戦とも言えるだろう。この時間への挑戦の中に社会参加を取り入れることで、人生の「完成期」を創り上げていくのではないだろうか。昔の人の倍ほどにも長くなった人生、老後も驚くほど長くなり、生活も豊かになる半面、地域社会（コミュニティ）や人間関係は逆に崩壊現象を示しはじめるようになると“有意義な老後”を送るためには、老人自らが主体者となって、自ら活動し、それを自立的に創造していかざるを得ないのだ。そこで、活動場所をやはり、崩壊しつつある地域社会に求めることで、地域社会の復興へともつながるだろう。（ここで定義する地域社会とは家庭以外の場所というふうに広義の意味でとった場合のことである。）つまり、地域社会参加することにより、そこでの自己の存在の確認を行っているといえる。このなにげなくしている社会参加は実はとても意味のあることなのである。社会と常に接触することで、世の中の流れを把握し、人と接することで、つまり活動（ここでの活動とは身体的活動のことである）することで、老いを遅らせることにつながっているのである。何もしないでただただ老いを待つのではなく、ここではボランティアをするという社会参加をすることによって世間との接続を保ち、老いの過程を意味あるものとして過ごしているのである。

第一段階社会離脱のその後としてのボランティアをするという社会参加はボランティアを受けるといふ社会参加には成り得ないということに一種の矛盾を感じた。というのは、ボランティア活動している現在、ボランティアを受けるといふことについて想定はしているが、実際のところとなると、ボランティアを受けるといふ気もないし、また、受ける側には恐らく回らないであろうと考えられるからである。というよりも、実際にボランティアを受けるといふことは考慮外であるように思えた。この矛盾は取り払うことはできないのであろうか。この矛盾を取り払うことができこそ、ボランティアがボランティアとしてあるのではないかと思った。つまり、ボランティアの相互作用へともつながるのではないかと思った。この“する”と“受ける”の差というものは、老いを上手に受け入れない／受け入れるの差ともいえるのではないだろうか。つまり、今まで“する”側だったからこそ“受ける”側に回ることに抵抗を持ち、それはつまり老いへの抵抗でもあるような気がした。

ではこの第二段階社会離脱を迎えた人々のゆくえはどうなるのであろう。昔の概念の余生としてただただ家でじっと過ごしてゆくのであろうか。今までは社会の中の集団の一部に身を置いていたが（属していたが）、これからは社会の中の個人として身をおくことになるのではないか。つまり、団体活動から個人活動へと転じていくのである。個人活動となると、それは趣味の領域となり、趣味を持っている／持っていないはその人のその後の人生に多大な影響を与えるのである。もちろん、第一段階社会離脱を経た時点で、残りの人生を個人活動（趣味）で過ごしてゆく人もいるであろう。また、ボランティアを受け

という社会参加に成り得なかったからの第二段階社会離脱だから、今度は自己の趣味活動として趣味サークルみたいな会に入ったり、つまり再び趣味の領域の社会参加する場合もあり得るだろう。この場合もこの趣味の社会参加から離脱する場合（第三段階社会離脱）の人々のゆくえはとなると、やはり個人活動となるのである。このように最終社会離脱（最後の社会離脱）を迎えた人々というのはその後の人生を個人で活動することにより、いかに自分自身で楽しめるかが、老いを満足のゆくもの、つまり人生の完成を創り上げるのである。つまり社会離脱を迎えた人々のゆくえは個人活動という社会集団には属さない方向へと向かってゆくのである。

この研究を通して、私が言いたいことは、ボランティア活動をすることは素敵なことから、進んでせよということでは決してない。この高齢社会の中を生きていく一つのモデルとして、老いの生き方の一つの選択しとして参考にさせていただきたいということである。長期にわたる老後を、つまり、第二のステージの人生設計をする際の、様々な老後の過ごし方がある中の一つとして、ボランティアをするという生き方があるということ考慮に入れていただきたいのである。以上、この研究が私のこらからの人生にもたらす影響が大であることは言うまでもない。

＝参考文献＝

- 青木桂之・青山英康・小田兼三・山田修平編，1995，『ボランティアの時代』山陽新聞社
日野原重明，1995，『豊かに老いを生きる』春秋社
日高幸男・松裏善亮，1979，『生きがいの創造（高齢者ボランティア入門13話）』日常出版
浜田晋，1990，『老いを生きる意味（精神科の診療室から）』岩波書店
角田久美子・大久保みたま・山本学，1995，「一人暮らし高齢者の食生活に対する地域食事サービスの役割」『日本家政学会誌』46:959-968
金子勇，1995，『高齢社会・何がどう変わるか』講談社
喜多村治雄，1996，『シニアの挑戦』同友館
小熊均，1991，『老いを生きる人びと』現代書館
小西康生編，1989，『老人の社会参加』中央法規出版株式会社
前田大作・猪口孝編，1993，『長寿社会総合講座 [1]長寿社会のトータルビジョン』第一法規出版株式会社
森岡清志・中林一樹編，1994，『変容する高齢者像—大都市高齢者のライフスタイル』日本評論社
牟田梯三，1996，『大事なことは、ボランティアで教わった』リヨン社
新谷弘子編，1992，『ボランティアの手引き—老後の生きがいプラン』ドメス出版
野上芳彦，1980，『ボランティアとその理論』杉山書店
野上芳彦，1981，『ボランティア活動』青也書店
野上芳彦，1983，『老人ボランティア入門（お年寄りの社会参加）』ミネルヴァ書房
野上芳彦，1986，『チャレンジ高齢化社会（人生80年時代を共に生きる）』ミネルヴァ書房
野上芳彦・小西昭三，1985，『老人ボランティアのすすめ（生きがいの探求）』京都新聞社

- 岡村清子・長谷川倫子, 1997, 『テキストブックエイジングの社会学』日本評論社
- 大島玲子, 1990, 『老いを生きる人々』朝日新聞社
- ロバート・コールズ・池田比佐子訳, 1996, 『ボランティアという生き方』朝日新聞社
- 老人給食協力会<ふきのとう>編, 1991, 『老人と生きる食事づくり』晶文社
- 斎藤茂太, 1998, 『明老快老ボランティア』家の光協会
- 袖井孝子編, 1982, 『定年からの人生』朝日新聞社
- 袖井孝子, 1992, 『定年からの人生設計』労働旬報社
- Stevens, Ellen S. 1991, "Toward Satisfaction and Retention of Senior Volunteers",
Journal of Gerontological Work, 33-41
- 高橋勇悦・高萩盾男編, 1996, 『高齢化とボランティア社会』弘文堂
- 徳久球雄, 1997, 『人の生き方としてのボランティア』嵯峨野書院
- 富永健一, 1992, 「社会変動としての高齢化」金子勇・園部雅久『都市社会学のフロンティア3』日本評論社
- 山口昇・高橋紘士編, 1993, 『長寿社会総合講座[7]市民参加と高齢者ケア』第一法規出版株式会社
- 樺山紘一・上野千鶴子編, 1993, 前市岡楽正「高齢者と定年問題」55-74, 大村英昭
「撤退の思想」233-248『長寿社会総合講座[9]21世紀の高齢者文化』第一法規出版株式会社

<ビデオ>

- 「ぬくもりと活力のある長寿社会をめざして～生きがいつくり健康づくり」
- 「ぬくもりと活力のある長寿社会をめざして～社会参加活動」制作－NHK徳島放送局,
企画・制作－財団法人とくしま“あい”ランド推進協議会
- 「明るい長寿社会をめざして高齢者の生きがいと健康づくり推進事業の理解のために」制
作－不明